級　友　・　志　・　天　職 (※1)

高普第９回卒　大　内　　弘

最近、級友のＳ君から手紙が届いた。「国連開発計画の専門家として、M国政府の要請によりＵ市に赴く。途上国支援の一環で、“顔の見えない日本”という批判に答えたい。現地の郵便事情により、しばしば音信が途絶える。」とのこと。経済学部を出て、商事会社に入った彼も、その会社を去る年齢になった。今度は「その国の市場経済にともなう民営化関連政策の立案」が主な任務という。これまで商社マンとして各国を歩いている間に育んだ「国際貢献の志」を実現しようという。思わず快哉をさけんだ。

しかし、彼もふと漏らしたが、「体力の限界を感じる年齢」に近づいている中での途上国勤務である。健康には十分留意するよう、願うや切である。

級友Ａ君のピアノ演奏会の新聞記事によれば、ベートーベンを弾くという。ぜひ、出かけたい。教室で、後ろの席から肩越しに、ベンツやポンティアックなど外車の名を教えた彼だ。

全日本学生音楽コンクールで入賞を果たし、講堂で披露の演奏会が開かれた。小池校長先生の誇りに満ちた紹介が思い出される。

その後、芸大付属に転校し、同大を経て、ヨーロッパの楽壇で活躍して来た。国内の演奏会もしばしばあって、同窓の諸兄姉ご存じのことと思う。

ベートーベンなどを弾くときの、あの激しいタッチには「体力の限界」など来ようはずがない。

脱帽そのものである。

級友Ｏ君は工学部を出て、Ｓ社に入り、フロッピーディスク関連の技術開発に貢献した。例のワープロ、パソコンの必需品である。今は某県の外部団体で、企業の技術開発の推進に従事している。メーカーから第三セクターへの転身は、当節話題の「天下り」の逆で、「天上り」かも知れない。

彼はまえから、「我国産業の依って立つところは技術革新」と熱っぽく話してくれた。天上がって、将に「天職」に就いたようだ。

級友Ｅ君は、地元で家業を継いでいる。数学では彼に負うところが大きかった。

夏休みに学校の教室に入り（当時どこからでも出入りした)、解析Ｉの問題の解き方をよく教えてくれた。木造教室で、蝉の声が賑やかだったはずだが、あまり気にした記憶はなく、正解ができた時の爽快感と彼の穏やかな笑顔が思い出される。

数学の良くできる親切な少年は、いま、その人柄を慕ってくる顧客に支えられて、家業に精励する当主になっている。

母校を卒業する頃はドリスディの「ケセラセラ」が町に流れていた。

しかし、４人の級友を初めみんな、この歌のような「なるようになるさ」ではなく、志をもって学窓を巣立った。そして「天職」を得、それを愉しんでいる例を挙げた。

（※１）創立百周年記念誌『相中相高百年史』〈1998（平成 10）年７月６日発行〉　第四部「思い出の記」より　　（ 転記&　村山 ）